

[美術紀行]

## 中国北魏時代石窟寺院の探訪

— 平成7年3月27日～4月5日 —

雲岡・龍門・麦積山の中国三大石窟に、もう一窟を加え、合わせて共産党革命ゆかりの地を巡る旅をしました。中国北部内陸の麦積山がある天水市から北東寄りの雲岡石窟のある大同市まで、貸し切りの60人乗りの飛行機で、黄河を斜に横切って2時間で飛んでしまうという、滅多にない企画を日中人文社会科学交流協会が行ったのです。こうでもしなければ、広い大陸に点在する四つの大石窟を短時間で一挙に回ることは出来ません。北魏の孝文帝が、都を大同から洛陽に移すために、馬で一ヶ月はかかったという距離を、列車も加え僅か14時間で移動する計算になります。誠に忙しい日本人向きの行程で、これでは当時の人々の苦勞やその時代は理解できなとお墓の中から北魏人の叱る声が聞こえて来そうです。

チャーター機は、ついでに、その航路上にある延安に6時間程滞留し、私達が毛沢東の旧居や、革命記念館を見るのに乗務員も共にして回るという大陸的な大らかさです。黄土高原の直中に位置する延安は彼ら中国人にとっても始めての訪問地ということでした。

また、石窟の時代順からは、北の雲岡から南へ下るのが普通です

## 雲岡石窟第20窟大仏



が、春まだ浅い中国に入るのに、逆に南方の上海を入口とし、徐々に北に進んで、少しでも寒さを避け、また、大同～北京間は大ていは夜行列車になることが多いのですが、昼中の列車とし、北方に広がる内蒙古の黄土の中に春めく風景を車窓から眺めようというのも今回の旅程の狙いで、巡る順序は上海→鄭州→洛陽→天水→延安→大同→北京となりました。

ここでは、少ない紙面の上で、上記のような面白い話も色々ありますが、コース中の四つの石窟寺院について時代順にお話ししましょう。

有名な雲岡石窟は武周(武州)山の南麓の炭田地帯にあって、東西1kmに及んでいます。北魏の道武帝は内蒙古の成楽から平城(今の大同)に遷都して帝位につきましたが、武周塞は当時の内外長城の間にあって、漢と匈奴を結ぶ要の地となりました。この地に石窟が開かれた第一の理由がそれです。次に、岩が砂岩で軟らかく成型に適し、第三に、この地は道武帝以来「神山」とされていました。

第四代文成帝の時(460年)に、前帝太武帝の廢仏を償うために高僧曇曜の建議で今の第16窟から20窟までの曇曜五窟が五帝の姿を模し

## 龍門石窟奉先寺洞大仏



鞏県石窟仏像(外壁)

た本尊(釈迦如来立像・弥勒菩薩交脚像・盧舎那仏立像・多宝仏坐像・無量寿仏坐像)を安置する窟として作られ、次に孝文帝の頃(471～494)に第9窟から13窟の五華洞が作られました。五華洞には大仏も彫られました。敦煌石窟を真似て中央に柱を残した方柱窟や前室の入口に矢張り岩から彫出した高い八角列柱を設けた西方様式があるのは圧巻です。仏像にも雲岡前半期には西方式が強く、仏教の説話表現も豊富です。

都が魏の国の真の中心地である南の洛陽に移されたのは第六代孝文帝の時(494年)で、帝は漢文化に傾倒していましたが、少数の鮮卑族で大局の安定は計れないと、この地で多くの漢人を登用し、雲岡の工匠たちをも連れ、ここにも同じような大石窟を作りました。黄河の支流伊河に面して南北に1kmにわたる龍門石窟は、古陽洞が最も早く窟のみが開かれ、次の宣武帝の賓陽三洞が雲岡に倣って、高祖孝文帝と宣武帝の生母の文昭皇太后及び自らの為にかかれたものですが、中洞のみが北魏の仏像を配し、過去・現在・未来の三世仏を堂々とした体軀の中国式服装に彫出しています。釈迦の前生の物語や皇帝・皇后の礼仏図、上方に維摩と文殊の問答、下段に種々の神王図と浮彫りで壁面を埋め北魏後期仏教の高揚を示しています。入口の火焰額と天上の蓮華飛天の美しい蓮華洞や、曇懸座の中尊釈迦像と左右大龕壁の荘麗な魏字洞も魅力があります。奉先寺洞は唐の則天武后を写したといわれなが



麦積山石窟

らわが白鳳仏の若々しい青年の風貌を持つ大仏や伴の天部・二王像に圧迫的な力強さがあります。

洛陽から東40キロ程の、古来、洛陽を護る要衝であった鞏県にも、龍門様式を習って小規模な五窟の鞏県石窟が、龍門と同じ頃に造られました。大力山を背にしたこの窟の第4窟までの窟構はむしろ雲岡にもあった方柱窟であり、方柱の四面の大龕内に脹んだ臉に特徴のある裳懸座の如来三尊像をいずれの窟も彫出しています。龍門と同じように帝后礼仏図を多く彫っているのは、この地が御幸の場所であるからです。北齊や東魏の仏像も後世に彫られていますが、整然として小じんまりとしたこれらの窟は雲岡や龍門のように大勢の人が訪れるところではなく帝王専用の寺廟であったかも知れないとも言われ、仏像の表情や岩肌の黄土色の明るさが他と異っています。

洛陽から黄河の支流を西に遙かに遡った天水の麦積山は仏教僧の禪觀修行の場として紅砂岩の赤味の強い切り立った塔のような形を見せ、雲岡前期様式の大仏もありますが、いずれも塑像を配した点がむしろ敦煌石窟に近く、同じ甘肅省の窟として中央アジアから続くルートに延長線にあり、これまでの石窟とは異風の石窟が無数に開かれています。北魏から西魏の柔い中国式服装の仏像が主流で、飛鳥仏の源流は、これまでの龍門説とは異って、この辺りであろうと考えます。

(村田靖子:写真も)

季刊 美のたより No.111

平成7年5月18日

発行 大和文華館